



本堂脇の千手千眼観世音菩薩



第 21 号
 玉貫山 長光寺
 〒169-0073
 東京都新宿区百人町 1-5-2
 TEL:03-3209-5360
 FAX:03-3200-7026
<http://www.chokoji.net/>

不思量にして現ず

位職 松倉 太鋭

人間一人ひとりには物思いがあります。坐禅の際に思いを捨てさ
 って無心になろうとしても、物事に対する好きや嫌い、良い悪いと
 いった思いがあると、どうしても潜り観念で物事を見てしまいます。
 坐禅儀の中にも「是非を管することなかれ」とあります。坐禅の中
 では良い悪いを考えません。思量そのものをしません。

坐禅の中で大切なのは、物思いを主役にしないことです。そうは
 いつでも他の脇役がどんどん浮かび上がって、どうしても主役にな
 ってしまう。しかしそれを忘れ、無心して物思いを中心に置か
 ない様にすれば、他の事実が明確にわかってきます。周りの事実が
 浮かび上がってきて、その事実即して生きていくことが人間にと
 って大事なこととなります。道元禅師はそのことを「不思量にして
 現ず」と言っています。

社会で生きていく上で 自分の物思いを中心に考えてしまうと、
 どうしても失敗してしまいます。皆の思いは一人ひとり違うのだから、
 自分の考えを中心にしてはいけません。中心に持っていない
 ことが人生において大事なことです。

長光寺の歴史

長光寺の歴史について「寺報」等で開創当時のことを何回かに分けて調査結果を報告してまいりました。もつともこれで四百年余の歴史をすべて調べ尽くしたものととは到底申せません。ほんの片隅にある資料を基に推察したものに過ぎませんが、これらの伝承されたものを後世に語り継ぎ、記録に残さねばなりません。

そこで来年を目前に『長光寺の歴史』として小冊子を発行しようと計画して資料等を集めております。創建当時から今日に至るまでの歴史資料をどれだけ網羅できるか判りませんが、代々法灯を継承していただいた先人への、ささやかな報恩となれば幸甚と存じます。

まず、江戸時代は平穩に守られてまいりましたが、幕末から明治初年にかけて大きな試練が待ち受けていました。廃仏毀釈です。

慶応四年に神仏分離令が出され各地で寺院、仏像、仏具等の破壊が行われました。奈良の興福寺の五重塔が売却されかかったり、貴重な仏像が夜店で売られたりしました。長光寺は破却されることはありませんでしたが、墓地の入り口にある地藏菩薩のお顔もその時に割られています。

それに時を同じくして寺の敷地が東京府の所有になりました。建物は言うに及ばず、樹木までも寺の所有を離れます。樹木を伐

採する場合も役所に許可をもらわねばなりません。その時代の住職は何をするにつけ、さぞ難儀なことであったことと推察します。しかし、この制度も時代の流れの中で廃止されたもようです。

また、大正十二年には関東大震災がありました。新宿地区では被害は軽微であったようですが、地震に伴い下町では大火災が発生して夥しい人的被害を招きました。百人町界隈でも火災が発生しましたが、拡大せずに消し止められたと伝えられています。

昭和に入り第二次大戦の戦禍では長光寺は大きな被害に遭いました。昭和十九年の十一月以降から米軍による空襲が帝都を襲ったといわれます。とくに昭和二十年一月二十七日には銀座から都心部にわたって被害が生じましたが、新宿方面は無傷であったといわれています。大きな被害があったのは三月十日の東京大空襲です。歴史を一変させてしまったこの惨禍で上野駅から東京湾が見えたという証言があるほど、東京の下町一帯は見渡す限りの焼け野原となりました。十万人以上の尊い人命が犠牲になりました。長光寺ではこの空襲が新宿方面に及ぶことを憂慮し、「本尊釈迦如来」「薬師如来」や「過去帳」をリヤカーに乗せて八王子に運びました。寺に住む家族も同じく山梨方面に疎開をしたそうです。

そして新宿百人町界隈も空襲がせまりました。四月十三日、二十四日、二十五日とたて続けに空襲が続きました。長光寺の本堂はこの十三日の空襲により、建物の礎石

を残して全焼いたしました。墓地にも焼夷弾が落ちて、墓石も炎に包まれました。現在でも墓地には焼夷弾による焦げた石柱が残っています。

空襲による灰燼に帰した街の惨禍を目の当たりにした住民の呆然自失ぶりは想像するに余りありません。先代の奥様は「墓地の通路には空襲の犠牲者の遺体が並べられていて、墓地の通路が使えなかった。申し訳ないと思いつつ、そのままにしてしまいました。生きることで精一杯だった」と当時を思い出して述懐しておりました。家族全員が空襲の犠牲になったのか、引き取り手の無い遺体は、そのまま長光寺墓地の空いた場所に埋葬されました。



空襲の焼け跡が残る石柱

第二回坂東観音巡礼 金次郎の発願像

第二回の坂東観音霊場巡りで小田原の第五番の勝福寺にお参りをいたしました。この寺は飯泉(いいずみ)観音といわれ、昔からお参りの絶えない霊場です。また二宮尊徳ゆかりの寺とも言われています。門をくぐり本堂にお参りすると、その傍らに金次郎の「発願の像」が建てられていました。ちょうど本堂に向かって若き金次郎が真摯に合掌低頭している姿です。

二宮金次郎像は全国の小学校にあります。その姿は「薪を背負い読書している姿」が一般的です。しかし、この寺の像は初めて見るものです。

その日の参拝が終わったのち、気になったので金次郎の伝記を調べてみました。

金次郎は幼少時より苦勞の連続でした。まず、五歳の時近くを流れる酒匂川の堤防が決壊して、田畑が土砂に埋まり農業が出来なくなり、復興のための過勞で十四歳に父を亡くし、二年後に母も没し、伯父に育てられることになりました。二十歳で自立することがかかいましたが、発願の像は十八歳の時の姿だそうです。

ある日金次郎が近くの観音様にお参り行くとき旅の僧がお経をあげておりました。金次郎は暫しそのお経に耳を澄ませます。

「そのお経は何というお経ですか。」
「和訓の観音経です。」

「お経はなんども聞きました、今ほど心に感じたことはありません。」

金次郎はわずかの心づけを旅の僧に渡して「すいませんが、もう一度お経を聞かせていただけませんか。」と言いました。旅の僧はおもむろに、もう一度読経を始めました。

お経が終わると、金次郎は大きな声で「本当だ。本当だ。」と叫びました。

その時に天地に流れる見えないお経の真意が分かったといえます。つまりは観音さまの慈悲ということ。

早速、菩提寺の考牛和尚のところに行って行き、報告をしたそうです。和尚は若十八歳の少年の真眼に驚き、且つその才能を見込んで寺の後継者になってくれるように頼んだといえます。金次郎はその後、世の中のために生涯尽くし続けました。



小田原の第五番の勝福寺にて

峨山韶碩禪師六五〇回大遠忌

本年度は峨山韶碩(がさんじょうせき)禪師六五〇回大遠忌にあたります。峨山韶碩禪師とは大本山總持寺を建立した瑩山(けいざん)禪師のお弟子さんの一人で、總持寺の二世となった方です。そして大遠忌とは大本山の建立や発展に大きく貢献した方を供養する為のもので、五十回忌以降に五十年ごとに行われる大きな法要のことです。今年には神奈川県にある總持寺で行われ、住職、副住職共々いつて参りました。

色々逸話のある峨山禪師ですが、特に有名なのは峨山道と呼ばれる山道のことでしょうか。峨山禪師が總持寺と永光寺の住職を兼務していた際、毎朝未明に永光寺の朝課を終わらせ、十三里(五十二キロ)にも及ぶ山道を越えて總持寺の朝課に間に合わせていました。この道を峨山道と現在呼んでいます。總持寺は峨山禪師を待ったために非常にゆっくりと読経をする大真読と呼ばれる読み方を、六五〇年たった現在でも習わしとして続けています。

この峨山道は今でも地元の方や峨山禪師の足跡を辿る人たちに親しまれています。



峨山韶碩(1276~1366)

施食会のお知らせ

来年もまた五月二十三日に施食会を行います。一年に一度のご先祖様の供養なので、どうぞ奮ってご参加下さいますようお願い申し上げます。

古塔婆入れ設置のお知らせ

皆様の御要望もあり、古塔婆入れを設置致しました。古くなった塔婆や、置き場がなくなった塔婆はこちらに入れて下さい。長光寺が責任をもってご供養致します。



初詣は長光寺へ

お正月は長光寺の御本尊様と、ご先祖様のお参りをすることをおすすめします。檀家の皆様のお話を伺っていますと、お正月はお墓参りをしてはいけないと思っっている方がいらつしやる様ですが、新年だからこそ、ご先祖様に報恩のお参りをしていただくことが大切な事と存じます。

長光寺では元旦から皆様のお参りをお待ちしています。お参りにいらつしやった方には、新年の祈禱をしたお札を差し上げます。

長光寺の年間行事(平成二十八年)

一月一日〜三日	大般若祈禱
二月十五日	涅槃会
三月	春の彼岸会
四月六日	花まつり
春予定	坂東観音巡礼
五月二十三日	施食会
七月	盂蘭盆会
九月	秋の彼岸会
秋予定	坂東観音巡礼
十二月一日〜八日	臘八摺心
八日	成道会

その他月行事として第一、第三土曜日に経験者様向け坐禅会。第二、第四土曜日に初心者様向けの坐禅会を、どちらも十四時から行っております。初心者様向け坐禅会に關しましては予約が必要となります。また梅花講を第二、四月曜日(変更あり)に行っております。詳しくはホームページをご覧ください。

年間行事、月行事、どなたでも参加できます。是非体験してみして下さい。

編集後記

◆どこへ向かうか

永平寺を下りてから早くも二年の月日が経ちました。下りてからの一年は新しい仕事を覚えるのに必死でしたが、一年経つと大分仕事にも慣れてきます。そうすると今度は新しい課題が浮かび上がります。これからの長光寺でなにを為していくか、というものです。

お寺離れが多い昨今、仏教自体に興味がない若者も少なからずいます。そのような人たちにどう布教し、どのようにお寺を盛り立てていくか。それが私を含め若い世代の僧侶たちの大きな課題となるでしょう。この課題と向き合い、よく考えてこれからも精進していきたいと思えます。

新しい年が始まりますが、どうぞ皆様来年もまたよろしくお願い申し上げます。

(徳允記)